

なからぎ

219号

2017年10月

私をフルマラソンに駆り立てた本

公共政策学部長 中島正雄

本は、私たちに活力を与えてくれる。私は、法学が専門であるが、研究生生活を振り返ると、学問的刺激を受けた書物が何冊も脳裏に浮かぶ。しかし、今回ご紹介するのは、堅苦しい法学の専門書ではなく、むしろ、肩こりをほぐしてくれるスポーツに関する本である。

2008年度から特定健康診査（メタボ健診）が実施されたが、健診で肥満の宣告を受けることを恐れた私は、2007年5月から減量のためにジョギングを始めた。運動を続けるには目標があった方がいいので、「フルマラソン完走はどうか」などと考えはしたものの、所詮、夢物語であるとあきらめていた。そんな時に会ったのが、田中宏暁著『賢く走るフルマラソン』（2007年3月、ランナーズ）であった。ランニングを推奨する新聞記事に「市民ランナーの必読書」と書かれていたので、さっそく、取り寄せた。

紙幅の都合上、本書について詳しく述べることはできない。概要を簡潔に紹介する。

著者の田中先生は、福岡大学スポーツ科学部教授。ご専門は運動生理学。ニコニコ笑顔を保てるような運動の強度を「ニコニコペース」と名付け、このような軽運動が生活習慣病患者の治療に及ぼす効用について研究されてきた。ある時、実業団の駅伝チームの監督との出会いがきっかけで、先生は「速く走るための科学的根拠」を探究されることになった。その結果、先生は面白いことに気づかれた。一つは、ニコニコペースのトレーニングを積み重ねれば、だれでもマラソンを完走できるということ。もう一つは、同じ体力でも、知恵を働かせれば驚くほど速く走れることであった。そして、先生は、これらを実証するべく、自らマラソンにチャレンジされ、すばらしい成績をおさめられたのであった。

本書は、こうした先生の研究成果とマラソン経験に基づく知見を、一般読者向けに分かりやすく解説した啓蒙書であり、「よりよく走るための知恵」が随所に記されている。読み進めていくと、多くのことに驚かされた。①筋肉中のグリコーゲンを使い果たすトレーニングをした後、レース直前の3日間はトレーニングをせずに、炭水化物をいっぱい食べることで、②レース当日に炭水化物をたくさんとるのは間違いであること、等々である。読み終えて、もうやるしかないと思った。自分の身体を実験台にして確かめたいと思った。そして、本書に忠実に数か月を過ごした。

2008年11月23日。ついにその日を迎えた。第18回福知山マラソン。走行中は、期待と不安が入り混じる。何とかゴール。ネットタイムは3時間36分44秒。54歳での初めてのフルマラソンにしては、上々の成績。何よりも、完走できたこと、また、後半になればなるほどスピードアップできたことに感激した。すべて本書のおかげである。ゴール後、感謝の気持ちをこめて、西の空（福岡の方角）に向かって深々と一礼した。

私は、その後もマラソンを続けており、大会の前日には本書を枕元に置いて寝ることにしている。ただし、ここ1年半は忙しさにかまけて全く走っていない。来る11月5日、本学創立記念の日に、再起を期して、フルマラソンにチャレンジするつもりである。

（なかじま まさお：公共政策学部教授）

御紹介の『賢く走るフルマラソン：マラソンは「知恵」のスポーツ』田中宏暁著 ランナーズ 2005.3刊（請求記号782.3ⅡT）は、2階視聴覚コーナーに配架していますので御活用ください。

インパクトファクター (IF) の功罪

図書館運営委員 大坪 憲 弘

Impact Factor (以下 IF) は、学術論文を投稿した経験のある方であれば一度は耳にしたことのある単語だと思いますが、ここでまず問題。以下の文章のうち、IF に関する正しい理解のもとに記述されているものを全て選んで下さい。

1. A 氏の研究業績には、IF の高い論文が目白押しである。
2. 分野を超えて学術論文を公平かつ正當に評価するための指標として、IF を用いることは適切である。
3. 学会誌の IF を高めるために、会員に掲載論文の引用を呼びかけた。

答えは以下で順を追って説明させて頂くとして、そもそも IF とは何か、どのような経緯で生まれたものか考えてみましょう。

IF は、Clarivate Analytics の提供する統計指標の一つで、1973年に創刊された Current Contents (以下 CC、多数の雑誌の論文タイトルだけを掲載した本) に収録すべき雑誌を選ぶための指標として、Institute of Scientific Information (ISI、Clarivate Analytics の数世代前の前身) を創設した Eugene Garfield 博士が提唱したものです。例えば今年を例にとると、

$$\text{2017年の IF} = \frac{\text{2015-2016年に掲載された論文が2017年中に引用された回数}}{\text{2015-2016年に掲載された論文数}}$$

のように算出されます (2009年以降は引用に時間のかかる論文の評価に対応する 5 年 IF も併用されています)。計算式からおわかりのとおり、この数字はある雑誌に掲載されている論文の年間の平均引用回数を表すもの

で、個々の論文の「インパクトの強さ」を直接示すものではありません。従って、上記の文章 1 と 2 は正しいとは言えません。

- IF の一般的な、本来あるべき用途としては、
- ・図書館での雑誌選定・廃棄方針の決定
 - ・研究者が論文の投稿先を決定する際の参考
 - ・雑誌編集者による競合誌との比較や編集方針の決定

などが挙げられますが、大学や研究機関での利用拡大に伴って、本来の定義を正しく理解しないまま個人業績評価や人事、プロジェクト評価、研究予算配分の基礎資料などさまざまな場面での「誤用」が増加しています。IF が業績評価に用いられるようになった背景には、大学院重点化施策 (1987~)、国研の独法化 (2001)、大学設置基準の改正 (2003)、学校教育法の改正 (2004) などによる自己点検・評価の実施と公表の義務化がありますが、IF を用いることで評価作業にかかるコストや時間を削減できる、研究内容に精通しない事務職員が関わる場合でも公平な評価が行えるといった、評価者側の事情もこれを後押ししているようです。

IF を業績評価の定量的指標として用いた場合の問題として、学問分野や雑誌の構成の違いなどにより数値の差が大きくなる点が挙げられます。例えば、ライフサイエンスと数学の雑誌では、IF に平均 6 倍程度の差があります。また、引用のしやすい総説や需要の高い統計資料を多く掲載する雑誌も IF が高くなる傾向があります。ランキング上位の雑誌の IF が非常に高い数値 (30~100超) を示すのは、一般には 80 年代以降の雑誌数増

加の反動でニュース性の高い雑誌や分野ごとの著名誌に購読が集中したためと言われていますが、一方で、IF 算出の分母（掲載論文数）にカウントされない論説やニュース記事が分子（引用数）には含まれるという特殊ルールの問題も指摘されています。皆さんご存知の Nature は本稿執筆時点で IF 40.137、Science は 37.205 ですが、興味深いことにそれらの 1980 年の数値はそれぞれ 6.237 と 5.708 でした（それでも十分高いと言えます）。これらがいずれも当時から世界をリードする雑誌であったことを考えると、単に営業努力だけで現在の数値まで IF が上がるとはやや考えにくいところです。

IF を個人の業績評価に用いるべきでないことについては、Garfield 博士自身が 1972 年の Science 誌に掲載された論文の中で明確に述べています。にもかかわらず誤用がはびこる理由として懸念されるのは、「IF が評価基準になると都合の良い研究者」の存在です。評価方針決定の場に有識者として関与する研究者が、意図的に IF の導入を進言するとしたらどうでしょう。IF の本質をよく理解した上でこれを利用しようとしているのであれば、まさに言語道断です。

さて、上記問題の 3 についてのお話をまだしていませんでした。雑誌の IF を高めるために編集者や出版社、学術団体が意図的な操作やそのための組織的な行動を起こすことは、反倫理的な情報操作とみなされます。わかりやすく言えば犯罪です。というわけで、例文の中には IF を正しく取り扱っているものは一つもありません。で、結論ですが、まずこれを読まれた方は、IF が何かを知らない人に正しく教えてあげましょう。また、誤った使い方に遭遇した場合は、積極的に指摘してあげましょう。自分で使うときは……道を踏み外さない程度に「うまく使う」のもアリかもしれません（笑）。まあそれは冗談として、一人一人がその本質を正しく理解し、自分なりの考えを持つことが、インパクトファク

ターの研究分野での有効利用につながるのではないかと思います。

現在では論文の検索やダウンロードも Web に移行し、CC も Current Contents Connect というデータベースに進化しています。その昔は、図書館に行かず CC で自身の研究に関連する新たな論文のタイトルを漁り、書棚からこれらの掲載誌を山ほど引っ張り出してきてはひたすらコピーするという体力仕事を毎週のように繰り返したものです。筆者はよく「今時の学生さんは楽でいいね」などと軽口を叩きますが、一方で、フリーアクセス誌などの台頭による情報量の急激な増加と、これに伴う論文の平均的な質の低下によって、良い論文に巡り合う機会はむしろ希薄になってきているのも事実です。情報科学の進歩が、学術研究の質をより高める方向で機能するよう、様々な立場の人が考え、一緒に話し合う良い機会なのかもしれません。

Garfield 博士は、本年 2 月に 91 歳で逝去されました。学術研究における情報科学への多大な貢献を称えとともに、謹んでご冥福をお祈り致します。

[参考]

1. 『インパクトファクターとは何か：正しい理解と研究への生かし方』、山崎茂明 (1998)、<http://mlib.kitasato-u.ac.jp/homepage/seminar1.html>
2. 『インパクトファクター — 研究評価と学術雑誌 —』、逸村 裕、安井 裕美子 (2006)、<http://ir.nul.nagoya-u.ac.jp/jspui/bitstream/2237/16626/1/10.pdf>
3. 『インパクトファクターについて』、Clarivate Analytics Japan、http://clarivate.jp/ssr/impact_factor/

(おおつぼ のりひろ：

生命環境科学研究科准教授)



「寿岳章子双六コレクション」 スライドショーを実施しました



京都府立京都学・歴彩館のグランドオープンの記念行事として、京都府立大学の展示・セミナーが、平成29年4月27日(木)に同館1階の小ホール西側で開催され、図書館も映像展示コーナーで「寿岳章子双六コレクション」スライドショーを実施しました。

「寿岳章子双六コレクション」とは、本学の元教授であり国語学者であった寿岳先生が収集された、江戸時代から昭和期にいたる双六(すごろく)206点のことであって、1986年度に本学附属図書館に寄贈されました。本学図書館報の第100号(1988年9月)の号外に「寿岳章子氏寄贈双六仮目録」が掲載されています。

今回のスライドショーでは、寿岳章子先生の206枚の双六コレクションの中から、代表的な絵双六33枚を選びました。江戸期のものについては「膝栗毛道中双六」など6枚、明治期のものは「子供あそびすごろく」など4枚、大正期のものは「世界第一双六」など10枚、昭和期(戦前)のものは「童話青い鳥双

六」など7枚、そして、昭和期(戦後)のものについては「おしん人生すごろく」など6枚を紹介しました。上映時間は約9分です。繰り返し上映しました。

大正13年生まれの寿岳先生は、幼少期から少女期にかけては、お正月には必ず、なぜかは知らないが、とにかくすごろくはやるものであり、羽根つき、かるた、そして、すごろくは、いわば正月の三種の神器であったと書かれています。

「寿岳章子双六コレクション」を見ておきますと、子供たちが、絵双六を通して、さまざまな知識や教養を学んでいたことが伺えます。そして、江戸、明治、大正、昭和へと進むにつれて、それぞれの時代の世相の影響を受けていることや、人々の関心事や価値観が変化していることが読み取れます。

なお、「寿岳章子双六コレクション」は、図書館規程第2条によって「特別資料」に定められている本学図書館のお宝の一つです。



29年度前期の利用状況について

4月28日（金）から歴彩館2Fにおいて新府大図書館がサービスを開始しましたが、貸出状況は芳しくありません。臨時休館の影響もあり、単純比較はできませんが、表1・2から開館日数は増えているのにも関わらず貸出冊数が昨年より減少、土日の利用も少ないことがわかりました。

現時点での貸出冊数減少の要因として考えられるのは、利用者の声として寄せられているように①キャンパスの中心からはずれていること、②2Fエリアが分かりにくい・使いにくいこと、③4月に図書館ガイダンスができず新図書館の利用案内が不十分であったことだと考えられます。

- ① 新図書館が入る京都学・歴彩館が大学キャンパスの端に位置していて、稲盛会館側の入口が現在閉鎖されています。旧館はどの校舎からも近く、講義の合間や生協にお昼を食べに行くついでに立ち寄ることが可能でしたが、8月まで新館は稲盛会館前の側道を通って下鴨中通側からしか入館ができませんでした。（現在は南側入口からも入館可能）これでは新しい図書館へ気軽に行こうという気にもならないと思います。図書を借りても返却に行くのが面倒という学生さんの声も届いています。外構整備が遅れ、返却ポストも未だ利用することができない状態です。
- ② 府大図書館エリアは小さな小部屋がいく

つもあり、どこにどんな資料があるのか分かりにくい、迷ってしまう、インターネットも旧館のように自由に使えなく不便だ等の不満がカウンターに寄せられています。特にB1書庫への入室が平日17時以降や土日にできないことが困るという意見が多いです。

また、一般利用者にもわかりにくいように、府大図書館カウンターを旧資料館エリアと間違えて訪れる一般利用者が毎日何人もおられます。

- ③ 大学図書館にとって一番大事な4月に移転・開館準備作業のため休館を余儀なくされ、現地での図書館ガイダンスができなかったことは非常に残念でした。

館内サインも現状に即していないものになっています。順次修正を施し、少しでもわかりやすいサインにしていく予定です。カウンター横に「利用ガイド」を10種類用意していますので参考にいただければと思います。

後期授業が始まったら歴彩館2F府大図書館エリアにぜひ足を運んでみてください。少なくともオープン直後よりは利用しやすい図書館になっているはずです。

快適な研究個室・グループ研究室や新しく蔵書に加わった図書が府大のみなさんをお待ちしています。

表1 4月～8月までの貸出冊数の比較

	開館日	貸出総数	内学内者	内協定校	内名誉教授	内府民
2016	89	11,833	11,711	122	0	
2017	116	11,537	10,740	207	1	589

表2 曜日別貸出冊数（2017年4月～8月）

	日	月	火	水	木	金	土	合計
府民	48	114	110	46	133	88	50	589
学内者	550	2,089	2,032	1,331	2,114	2,129	495	10,740
名誉	0	0	0	0	1	0	0	1
協定校	14	54	41	15	46	27	10	207
	612	2,257	2,183	1,392	2,294	2,244	555	11,537

図書館からのお知らせ

【2017オープンキャンパス】；図書館を見学していただきました!!

7月22日(土)・23日(日)にオープンキャンパスが開催され、好天にも恵まれて、昨年を上回る大勢の高校生、保護者の方々と賑わいました。

図書館は、4月28日に京都府立京都学・歴彩館の2階に移転、新館としてオープン以来、これまで閉館していた土曜日・日曜日も9時から17時まで開館しています。

昨年までは、図書館開放事業として臨時開館して2階閲覧室を開放し、蔵書資料をご覧いただきましたが、今年は、通常開館の形で自由に入館していただきました。

ただ、残念なことに京都学・歴彩館の周辺が整備中であり、府大キャンパスからアクセスの良い入口が全て閉鎖されており、下鴨中通に面した東側入口1カ所しか開いていなかったため、府大キャンパスからはとても来にくい状態でした。

それでも来館者数は、22日(土)151人(うち高校生88人)、23日(日)627人(うち高校生382人)の合計778人と、館内は多くの高校生、保護者の方々と賑わい、校内ツアーコースで図書館を見学した人、ご家族連れ、じっくり資料を手にとって見る人等々、それぞれに有意義に過ごしていただいたようです。

今度は本学学生としてゆっくり図書館を訪れてもらうことを願いながら、今後ともサービス向上に努めていきます。



〈高校生等で賑わう閲覧室〉

カレンダー

9:00~21:00
9:00~17:00
休館
第2水曜日
祝日
年末・年始

※平日17:00以降、土日は行っていないサービスもあります。
ご了承ください。
歴彩館の周辺整備の遅れのため、当分(文学部研究室引越し完了時)まで返却ポストが利用できません。ご迷惑をおかけしますが、開館時間中にカウンターへ返却してください。

2017年10月							2017年11月							2017年12月						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7				1	2	3	4						1	2
8	9	10	11	12	13	14	5	6	7	8	9	10	11	3	4	5	6	7	8	9
15	16	17	18	19	20	21	12	13	14	15	16	17	18	10	11	12	13	14	15	16
22	23	24	25	26	27	28	19	20	21	22	23	24	25	17	18	19	20	21	22	23
29	30	31					26	27	28	29	30			24	25	26	27	28	29	30
														31						

★10/10(火) 夏休み貸出返却日



★12/11(月)~ 冬休み貸出スタート
(府大学生、教職員のみ)
返却予定日 1/16(火)

★12/28(木)~1/4(木) 年末年始休館